

秋葉だより



開く つなげる とともに
令和8年9月24日

「虫の声」

校長 近藤 伸

すっかり日が暮れるのも早くなり、今日の日没時間は17時37分でした。また、日没後の薄明りの時間も6、7月に比べて20～30分も短くなるようです。昔から「秋の日暮れはつるべ落としのごとく」ということわざがありますが、今の子どもたちには「つるべ」とは何なのかということから説明しないと、このことわざの意味が分からないかもしれません。先人たちは秋の日暮れの太陽が沈むのが、井戸のつるべが落ちる速さと同じように速いことを生活から実感したのでしょう。このような先人の日々の気象などの自然と普段の生活とを結びつけて実感するという感性には本当に驚かされます。現代の私たちがそのような感性を持っているのかと問われたら、私は残念ながら自信がありません。

しかし、少しだけ自分にもそのような感性が残っていると感じられた出来事がありました。それは、私が仕事を終えてJRの路線橋を渡ってバスに乗る道すがら、川沿いの草むらの茂みから秋の虫たちの素晴らしい音色を聞いた時のことです。私は思わず立ち止まったり、足の歩みを遅くしたりしてその虫たちの音色に耳を傾けました。すると私の足音がやんだことに安心したのでしょうか、一層と虫たちの鳴く声が大きくなりました。さらに音色も数種類の音が重なり、まるで虫たちのオーケストラの演奏を聴いているようでした。中には聞いたことのない響きの音も聞こえてきました。私は思わず「あれ松虫が鳴いている ちんちろちんちろちんちろりん あれ鈴虫も鳴きだした りんりんりんりんりん いんりん 秋の夜長を鳴き通す ああおもしろい虫の声」と小さい声で口ずさみました。この歌は現在も2年生の音楽の教科書に載っている「虫の声」という歌ですが、115年以上前の1910年（明治43年）に文部省唱歌として初出されています。私も思わずこの歌を口ずさんでいたことを思い返すと少し恥ずかしい気もするのですが、なぜ虫の音に足をとめたり、歌を口ずさんだりしたのでしょうか。いろいろ考えた末に出た答は、このことは「自分の原体験」と繋がっているということです。横浜で生まれた私ですが、小学校の頃はまだ周囲に自然が残っていて、家の庭にも通学路にも多くの虫がいました。また時にはとかげやムカデ、青大将やヤマカガシなどの蛇にも遭遇することもありました。今回、虫の音を聞いた時に自分が学校で教わった「虫の声」の歌詞や母親がこの歌をよく歌ってくれたことなどが原体験として覚えています。もう60年近く前のことでも私のそのような原体験が今の生活に結びついて影響を与えているのでしょうか。

現代は生活が便利で豊かになりました。子どもの生活も変わり、遊びも原っぱや空き地での体を使った集団での遊びから、スマホやパソコンなどを使った個の遊びも多くなってきました。また、自然に親しむ経験も減ってきました。これから10月、11月と秋本番を迎えます。芸術の秋、スポーツの秋、読書の秋・・・様々な秋を楽しんでほしいと思っています。スマホやパソコンなどを少しだけ手放し、秋の夜長を家族で虫の音の世界に浸ってみたり、共通のスポーツを楽しんだり、同じ本を読んだりしてはいかがでしょうか。きっと、そのひとときの様子や会話が私のように子どもたちの原体験として大人になっても記憶に残るかもしれません。

今月も子どもたちが季節の変化を感じながら、健康、安全に留意して過ごしてほしいと願っています。